

佐藤鐵太郎の海洋国家論



会長 渡辺利夫

石川泰志編著の『戦略論体系:佐藤鐵太郎』(芙蓉書房出版、2006年)は名著である。

佐藤鐵太郎は日清戦争従軍の後、戦史研究の重要性にめざめ、イギリス、アメリカへの留学を経て海軍大学教官となり、明治35(1902)年に『帝国国防論』を完成した。

日露戦争に出陣した後、海軍大学で「海防史論」を講じ、明治41(1908)年に『帝国国防史論』を刊行、海軍大学校長をも歴任した戦略家である。

海防の重要性を説く一方、陸軍中心の大陸政策に否定的な見解を率直に吐露した『帝国国防論』は、時の海軍大臣山本権兵衛を経て天皇陛下に奏呈されたという。

『帝国国防論』において佐藤鐵太郎は次のように述べる。

「我帝国の確持すべき方針は、一に唯征服を大陸に試むるの壮図を避け、天与の好地勢を利用し海上の勢力を皇張り、且つ之を永遠に維持し得べき所以の道を図り、以て自強の作を講じ、而して国利の増進を海上権力の暢達に求めて百世渝らざるにあり。……吾人は現今の形勢を按じ絶東の平和を維持せんが為めには、断然我海軍を拡張せざるべからずを知り、直ちに之を実行するに決せり。

惟ふに後來東洋の平和を攪擾するの恐れあるは日本国の侵略的攻略ならん。然れども此島帝国が大陸に侵入せんとするには、必ず先づ海路により軍隊を輸送せざるべからず。故に若し果して克く海上交通を拘束することを得ば、其の野心を抑制すること頗る容易なり。吾人が我海軍の拡張に賛同する所以のものは、実に日本国が従来懷抱し来れる野心を未萌に防がんとすればなり」

この一文の中に日本は有力な海軍を擁した海洋国家たるべしとする佐藤鐵太郎の戦略思想が凜として表出されている。

あの広大な国土に「支那四億」の民を擁し、地方ごとに言語、文化、風俗、習慣のそれぞれを異にする、日本人には想像もつかないような茫々中国を陸軍中心の兵力で長期占領支配することが容易であろうはずはない。

モンゴル帝国のような史上に例をみない凶暴な領土拡張衝動を満身に秘めた民族であればいざ知らず、日本のように元来が極東の片隅にこじんまりと住まっていた「温室育ち」(梅棹忠夫)の民族の遺伝子の中にはそのような世界制覇への衝動は組み込まれていない。

日本の生きるべき道は「海洋」にある。